

## 鳥取県水産試験場からのお知らせ

### マアジ加入量調査結果速報

鳥取県水産試験場では日本海区水産研究所、西海区水産研究所および島根県水産技術センターと共同で、マアジ幼魚の新規加入量調査を実施しましたのでお知らせします。本調査結果はホームページにも掲載しております。

<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=101110>

#### 結果の概要

- マアジ幼魚は対馬海峡から島根県日御碕の沿岸に集中して分布した。
- 今年のマアジ幼魚の加入量（来遊量の多さ）は、2003年を1とすると、今年の前年（2009年）の1.26を上回り2.0となった。
- 採集されるマアジの大部分が小型であったため、計算された加入量は過大である可能性があり今後解析方法を検討する必要がある。

#### マアジ幼魚の採集結果と分布状況

2010年5月18日から6月10日にかけて、図1に示す鳥取県西部から長崎県男女群島周辺の海域において、合計90地点で中層トロール網での漁獲調査を実施しました。中層トロール網による試験操業の結果、合計32,211尾のマアジが採捕されました。

図1に2010年のマアジ幼魚と50m深水温の分布を示しました。今年は海水温が低めに推移していたことと、島根沖冷水（14～15℃）の強い張り出しの影響により、マアジ幼魚の適水温と考えられる水温帯16～18℃（深度50m）が対馬から島根県日御碕の大陸棚上に限られ、マアジ幼魚はこの水温帯に集中していました。一方、日御碕以東では適水温帯が狭く分布も僅かでした。

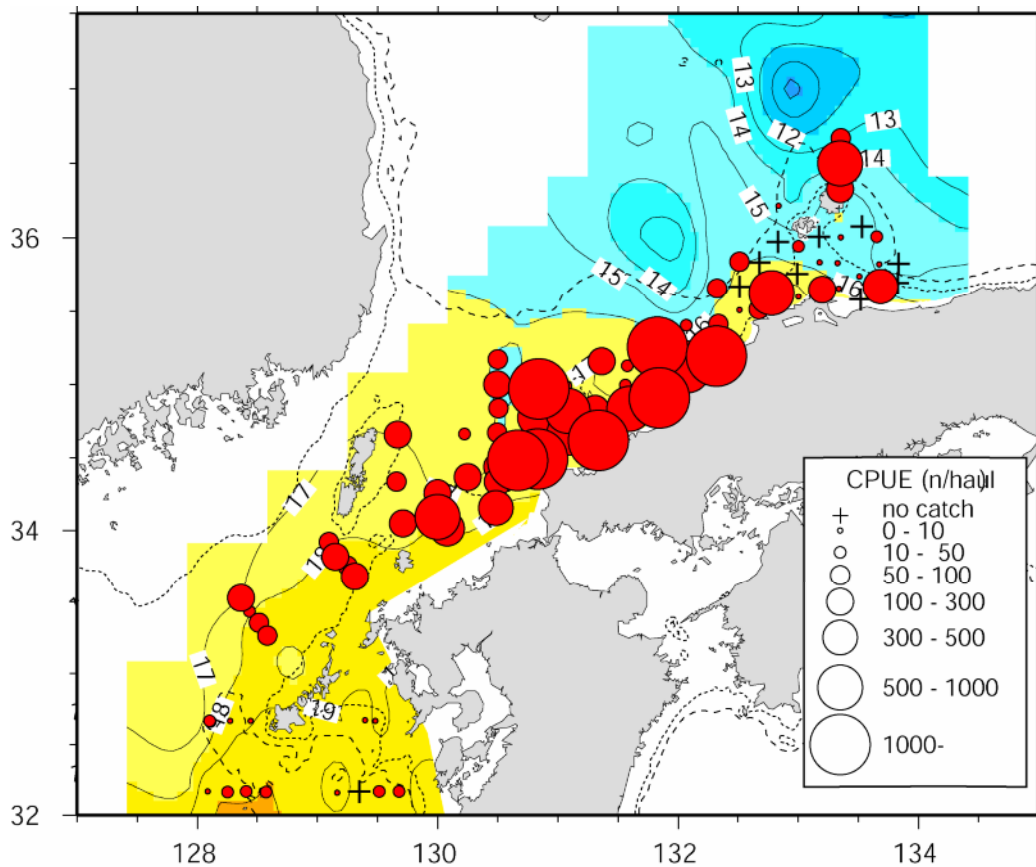


図1 2010年のトロール網調査結果 円の大きさはマアジの採集量の多さを表し、+は採集されなかった点を表す。実線の等温線は水深50mの水温分布を表す。

### マアジ幼魚の加入量と今後の漁況

マアジ幼魚の採集数と水温分布を勘案して求めたマアジ幼魚の加入量指標値（来遊量の多さ）は、2003年を1とすると、今年は前年（2009年）の1.26を上回り2.0となりました（図2の折れ線グラフ）。

一方、まき網1ヶ統あたりの当歳魚漁獲尾数は2008年から2009年にかけて減少しており（図2の棒グラフ）、現在も漁獲量は低調に推移しています。こうしたことから、加入量指標値と山陰におけるまき網の漁獲実態とが合わなくなっていることが予想されます。

マアジは主に東シナ海で生まれ、対馬暖流に乗り、日本海に漁獲対象として加入すると考えられています。また、マアジはイワシ類やサバ類と異なり、ある大きさ（7~8cm）になると大きな移動はせず、瀬等の海底地形に依存して分布すると考えられています。今年は、前年（2009年）同様に中層トロール網で

採集されたサイズは例年より小型のものが主体となっていました(図3)。このような場合、小型魚の多くが山陰沖で漁獲加入しない可能性が考えられ、前年のように加入量指標値と漁獲実態が合わない可能性があります。こうした状況も反映できる解析手法が今後の検討課題となります。

詳しい結果については、後日開催する報告会で説明いたしますが、現時点では少なく見積もっても前年並みの加入量は期待できると考えています。

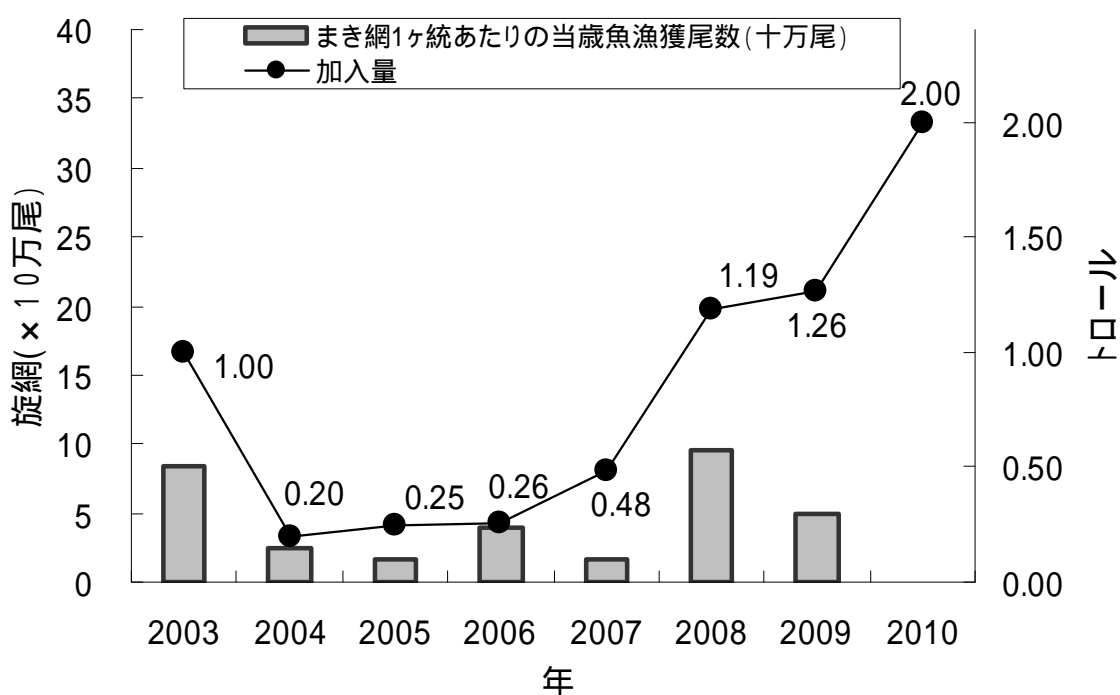


図2 試験操業結果から求めた加入量と境港におけるまき網1ヶ統あたりの当歳魚漁獲尾数(6~12月に水揚げされたマアジ当歳魚の尾数を水揚げしたまき網の数で割った値)の年変化

調査で採集されたマアジの体長組成

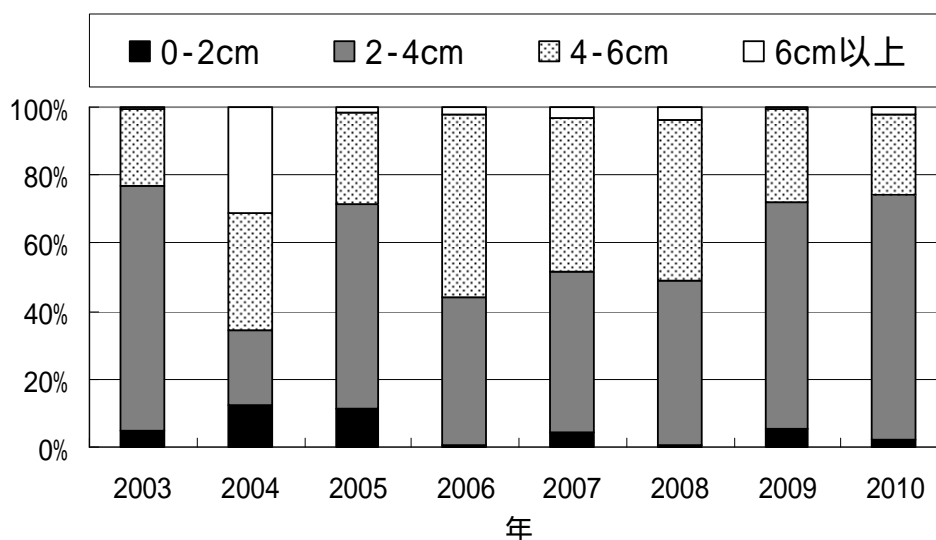


図3 中層トロールで採集されたマアジの体長組成

### マアジの資源回復計画について

マアジは小型魚のうちに獲るより、一年後に成長したものを獲る方が利用価値は高まります。また、小型魚を獲りすぎてしまうと来年以降の産卵親魚の減少につながり、今後の再生産に悪影響を及ぼすことが考えられます。現在、日本海西部・九州西海域におけるマアジ資源等の回復を図るため、当該海域で操業するまき網漁業関係漁業者による小型魚を主とする漁獲があった場合の漁場移動や休漁等による漁獲努力量削減措置を実施すること等を内容とした「日本海西部・九州西海域マアジ（マサバ・マイワシ）資源回復計画」が取り組まれています。このような取り組みによる資源回復が一層期待されます。

担当 志村  
TEL 0859-45-4500